

「藤原賞」の読み方について

タイトルをただ見ただけでおおよそ内容の見当が付いた人も少なくないかも知れない。ごくありふれた話ではあるが、2015年度の藤原賞受賞者である中澤哲夫氏の勧めもあって、この小文を投稿することにした。

きっかけは、筆者が2015年4月に長野地方気象台に台長として赴任したことであった。赴任後まもなく、諏訪市から「第48回藤原咲平先生をしのぶ会」(第1回)への出席案内を受け取った。藤原咲平博士は長野県上諏訪町(現在の諏訪市)の出身である。

博士は「雲を掴む話」などの気象に関する一般向けの著作や台風に関する「藤原の効果」でよく知られている中央気象台第5代台長(現在の気象庁長官)であり、気象学会の表彰の一つである「藤原賞」は博士の功績に因んで設けられている。

1932年に博士を会長として霧ヶ峰グライダー研究会が設立され、1934年には日本で最初のグライダー大会が霧ヶ峰(諏訪市)で開催された縁で、1961年に霧ヶ峰強清水のグライダー滑走路脇に博士の記念碑が建立され、1967年からは毎年7月に記念碑前で「藤原咲平先生をしのぶ会」が行われている。開催に当たって、長野地方気象台長も挨拶を述べるのが慣例のようである。

さて、2015年のしのぶ会は7月11日(土)に開催された。当日、霧ヶ峰は快晴で遠く富士山まで見え、近くの車山には富士山レーダーの代替として設置された車山レーダーのドームが白く輝いていた。

まず、諏訪市の金子ゆかり市長から挨拶があったが、藤原咲平は「ふじはら さくへい」と読むのが正しいとお話からスタートした。これまでずっと「ふじわら さきへい」と思っていた私は不意を突かれた気分のまま、用意したメモを片手に市長に続いて挨拶を始めた。車山レーダーと富士山レーダーの関連、さらに博士の甥である作家新田次郎(藤原寛人)氏の話の織り交ぜながら挨拶した。ここは「ふじはら」と言うべきと意識したが、慣れないためか「ふじわら」と言ってしまう。結局、多少開き直りつつ「ふじわら」のままで挨拶を終えた。



第1回 霧ヶ峰強清水の藤原咲平博士記念碑。

式典後の昼食会の席では話題提供として、「藤原の効果」と新しい気象衛星ひまわり8号の紹介を行った。配布した資料の中に、英国気象学会誌に出版された博士の論文タイトル部分のコピーを載せていたところ、新田次郎氏の弟である藤原光人氏から著者名の綴りが「Fujiwara」となっているところに本来は「ふじはら」とあるとの思いが出ているとお話を伺った。

藤原咲平博士の評伝の中には上記の英語綴りの件も含め、名前の読み方についてしっかり紹介している本もあるが(根本 1985)、私が一般の人名辞典を当たった限りでは「ふじはら」となっているものは皆無であった。つまり、世間一般には「ふじわら さきへい」であり、本人も了解して受け入れていたようであるが、直接親族の方から話を伺うと本人はこだわりを持っていたことは確かであろうと感じた。年に一度の気象学会藤原賞授与の機会に本来の「ふじはら」と読んでは如何であろうか。

参考文献

根本順吉, 1985: 渦・雲・人 藤原咲平伝. 筑摩書房, 7-8.

(長野地方気象台 高橋清利)